

〔報告1〕

日本の開教活動とアジア認識

——「中外日報」のアジア関係記事から——

槻木 瑞生

一 近代史研究と「中外日報」

1 宗教紙の意味

「中外日報」は仏教系宗教紙として一八七七年一〇月に発刊された「教学報知」に端を発し、一九〇二年に「中外日報」と改名されたものである。今日に至るまで刊行を続け、宗教紙としては最も長命な新聞の一つである。日本の近代展開とともにあったこの新聞は、まさに日本の近代の宗教活動の証言者といえることができるだろう。

近代日本とアジアの関係史については、これまで政治、経済、軍事などさまざまな方面から検討されてきている。しかし、その一方で文化あるいは生活、宗教という側面からの追究は軽視されることが多かった。宗教活動は、政治とも経済ともまた軍事の分野とも差異があり、しかも庶民の生活に働き掛ける活動であるから文化や生活と密接な関係を持つ。近代の宗教活動は近代史の重要な側面であり、これまであまり検討されることがなかったことは、近代史研究の大きな欠陥であった。

こうしたことから「中外日報」も単に宗教活動史に関する資料としてではなく、この近代文化史あるいは生活史にわたる記録の意味を持つものとして見直さなければならぬ。

2 「中外日報」のアジア記事について

文化あるいは生活の側面から日本とアジアの関係史を検討するために、ここ数年かけて「中外日報」のアジア関係の記事の抽出を試みてきた。抽出の対象としたのは発刊より一九四五年の日本の敗戦に至るまでの期間である。本文末に付けたものはそのうちの一部で、内容面で整理できた部分についてのものである。

抽出にあたっては何がアジア関係記事かという判断がなかなか難しかった。しかし今回の抽出作業では、開教活動(布教活動を含めた宗教者の広範な活動)に関するものを中心とすることとし、例えばインドのタゴールの宗教論について論じているものなどについては記事の内容によって取捨した。

こうして整理してきた「中外日報」のアジア関係記事について見ると、やはり中心となっているのは東本願寺系統の宗教活動に関するものである。しかし、「中外日報」は浄土真宗の記事に限らず神道やキリスト教系統の活動に関する出来事も積極的に拾っていて、この点で他の宗教紙と比べると非常に幅の広い編集になっている。本紙が真宗系であるということはそれなりに限定された世界を持つものであるが、その一方でこうした編集方針から日本の宗教活動を鳥瞰するための重要な資料になっていることも間違いない。

アジア関係記事の内容から見ると、数が多いものとしては①布教活動の情報、②現場の宗教事情、③日本および各国の政治情報、軍事情報についての記事が目につく。このうち①と②の記事は現場で活動している宗教者からの書簡や聞き書きという、いわば生の情報で構成されているものが多い。それは個人的な情報であるために、それなりに偏った情報であったり今日からみれば判断に誤りがあるものもあるが、同時に当時のアジアと接触した日本人の率直な考えや感想が窺われるものもなっている。

近代日本のアジア認識は、政府や有力な諸機関から出されたニュースを基礎として形成されることが多かった。「中外

「日報」の諸記事についても、他の一般全国紙とともにそうした傾向を免れてはいない。しかし、宗教が個人的な側面を強く持つためでもあろうか、そうした大本営発表的なニュースの合間に、それに対立する観点を持つ個人の所感が掲載されている所がこの新聞の特色と言えるだろう。

二 「中外日報」とアジア記事

1 「中外日報」の個人的体験記事について

「中外日報」からアジア記事を抽出したねらいは、これらの記事を基にして日本の宗教者がいかにアジアと関わろうとしたかを明らかにしようとするところにある。

前節で「中外日報」の記事を内容から①、②、③と分類した。③については一般のマスコミに掲載された記事と大筋においては一致するものが大部分である。記事の報告者が直接現場にいた場合でも一般紙を通して得た知識を基礎にした発言という、いわば間接的な知識によって書かれた記事である。これに対して①と②は朝鮮や中国での直接の体験や個人的に得た情報を記事にしたものである。直接の体験記事はその人が体験した範囲内のものであり、裏付けのない場合も多く、すべての場合に一般化できるといふ類いのものではない。従って、間接的な知識による記事よりも、一般化・論理化という点で重みの欠ける印象を受けるのは仕方ないところである。それにもかかわらず、こうした体験記事は重要な意味を持っている。それは個人的な体験は新しい事態に直面すると柔軟に見方を変える可能性を持っているからである。

一九〇六年一〇月二三日より七回にわたって『円心雑談』が連載されている。これは朝鮮開教を初めて行ったと言われる奥村円心のインタビュー記事である。その第三回目に奥村は、朝鮮の生活について次のような言葉を口に出している。

ドーモ朝鮮の不文明なことには、驚ろきました

殊に其汚ないことには困ります、

ソレハソレハ韓民の生活と云ふものは浅間しいものであります

其家屋と云ふものが、僅か畳二枚敷ばかりのものです

農業の仕方にも、全く野蛮な仕方であり、単に野生の果実を拾ふと云ふに過ぎませぬ……日本人などに耕作さしたらば、其田からは、何程の收穫を得るかしれませぬ

しかし、いかに当時のことであれ、朝鮮の農業のやり方は奥村の言葉どりの状態であるはずがない。また、当時の日本の写真資料などを見ても中国や朝鮮と、目に写る限りではあるが、生活の状態にそれほどの差があるようには思えない。

「中外日報」の体験記事を読む時に、その内容にはある程度の偏見があるように見えることがある。中国人や朝鮮人の貧しさ、衣類や住宅の汚さ、教育を受けたことのない人々の多さ、彼等が信用のおけないこと、信者となってもそれは日本の権威を借りようとしているだけであることなどが様々な記事の間に織り込まれている。

記事に書かれているほど事実に差がなくてもこのように奥村の目に写った理由の一つは、異文化に接触した驚きであろう。日常の生活で馴染んでいないものに接した時に事実以上に相手が立派に感じられたり、その反対に欠陥だらけに思えるのはごく普通にある経験である。

むしろこうした個人的な体験は体験を積み重ねることによって、ありのままに中国や朝鮮の社会を捕らえる第一歩となる可能性があったと言ふべきであろう。

朝鮮一般の人間は怠けて居ると予ねて聞いても居り、又た実際見た所が其のやうに見えるが子供の賢ささと愛らしさを見て感ぜずには居れなかつた（「朝鮮教化と邦語」一九一〇・一〇・六）

この文章は朝鮮人を同化せよとの趣旨で書かれたものであるが、しかし奥村のようにただ朝鮮の社会を罵倒することだけで済ましてはいない。

少し時代は下がるが藤波大円は次のように言う。

ただ然し常に耳にする言葉は「朝鮮人は駄目だ、金があれば居食いをして働かない」と、なるほどこれは事実らしい、かかる退廃的気分は内地に於いても各階紙の上に住々見らるることであるが、鮮人には比較的多いと云うにすぎない、久しい間の彼の歴史が彼等から人生の光明を奪った結果であるが、これらの結果を如何に処理するかは在鮮の為政者の如何と内地人の自覚にあることではないか。（『朝鮮巡講雜感(一)』一九二九・六・一九）

満洲事変前後は日本人にとつてもなかなか発言の難しい時期であつたが、この時期にほかにも朝鮮総督府の政策に対してかなり強い批判が「中外日報」には掲載される。三浦参玄洞「台中の不祥事件につき朝鮮統治に三省を要求」（一九三二・七・四―六）、竹中慧照「朝鮮開教私見」（一九二九・一〇・六―一〇）などがそれであり、また無署名のものにも「烈日の街頭を歩んで朝鮮統治の将来を思ふ」（一九二九・八・一―二）がある。

こうして朝鮮人の生活に近寄つた結果、植民地への批判を滲ませる文章が開教師の間から出てくるようになった。

布教についても日本の仏教をそのまま伝えることが布教であるとはしない考え方も出てきている。菅真海は「真宗を漸次支那化せしむるの方法に出づるか、飽くまでも日本の其儘を彼に崇拜せしむるか」（『菅真海氏支那布教談』一九〇五・一・一八）と問題を提出し、布教は日本に同化させることが目的ではなく相手の生活に寄り添うことが大切であると主張する。朝鮮については李容明の書簡を掲載して、「ミイラにならざればミイラは取れざるべし」（『韓開教に就き』一八〇六・六・一五）といつその主張を強めている。

こうして個人体験の系譜は「中外日報」の中で大きな位置を占める主張となつている。

2 開教活動と国家

イ 同心円の植民地観

小沢有作氏によれば、明治末期に文部次官を勤め、開明官僚として名前のあった沢柳政太郎の植民地観は同心円を描くように構成されているという。日本を中心として、朝鮮や台湾は身近に感ずる植民地であり、「樺太」や「満洲」は遠く、「南洋」はさらに遠い。これは日本からの距離に応じて実感が遠のくとともに、日本を基準として植民地を見ていることを意味している。つまり日本の近代的な政治や文化、言語を受け止めている度合によってその植民地の文明開化の度合いをも判断しているのである。

実はこの同心円の発想は日本国内においてもあった。東京、それも政府を中心とした同心円があって、この植民地観はこの国内の同心円を拡大したものに過ぎないのである。

沢柳の植民地観は沢柳一人に止まらず、多くの行政官やインテリたちの植民地観でもあった。だから多くの人は植民地の問題を東京の発想を中心に据えて考え、また日本政府の政策を金科玉条として見る傾向があった。

これは現地で開教に携わっていた僧侶たちの実感的アジア認識とはどこかで食い違うものがある。ではこの日本を中心とした同心円の植民地観を宗教者はどのように受け止めていたのだろうか。

ロ 開教と政治

「中外日報」の記事によれば、中国東北部や朝鮮半島における開教活動はすでに一八七〇年には始まっていて、しばしば政府の動きよりも先行し、そして政府もこの活動を利用しようとした。政府の立場からすれば、先行する宗教家の活動は植民地における政策の実験の場でもあったし、また満鉄や朝鮮総督府が活動を開始してからは満鉄や総督府の影響が及ばないところに宗教家の活動があり、植民地政策の重要な一翼を担っていた。次の記事はそうした事情を典型的

に現している。

伊藤統監は植民地に於ける政策は宗教に待つもの多きことを認め此程在韓国なる我仏教各派の代表者を引見して其意見を徴したり（「宗教と韓国政策」一九〇六・四・三）

政府の方から宗教各派を利用しようとしただけではない。宗教各派の開教の論理の中に政治権力を利用しようとするものがあつた。山哲の「支那布教私見」（一八九八・六・九）を見てみよう。

山哲の述べるところによれば中国では旧来の仏教を復興して仏教を受け入れないし、旧来の仏教も日本の仏教と性質が違ふ。また、名家豪族に布教できれば他の人々は名家に従つて入信するという人もいるが、名家は儒教を信じていて仏教を受け入れない。「支那人の頭脳は色と欲とより知らない動物の如く、宗教などは天から下がつた禪とも感ぜざるべし」であるという。要するにさまざまに努力しても中国人の抵抗に会つて布教がうまく行かないという。そこで

而して今や彼地布教の方法として寧ろ我政府と何等かの關係を以てするの便利なるを説んとするものなり……我政府たるもの……我仏徒が政府の意を体して彼地の布教に従ふに於て何ぞ之を保護せざるの理あらんや（山哲「支那布教私見」一八九八・六・一三）

と説く。政府の応援を得て布教するというだけでなく、開教活動そのものが政府の意向を受けて行われているという。布教が政府の活動と關係を持つと考えるようになると、その活動の内容が単なる宗教活動を越えた多様なものになってしまう。キリスト教の本多庸一は次のように主張する。

（朝鮮への布教には二つの意味がある。一つは民衆の生命財産を保護することである。例えば「官吏にして道ならざることを爲して民を苦しむることあらば宣教師にして一通の書簡を認めて之を政府に送らばその効能や実に大なりと云ふべし」である。二つ目は「朝鮮人に殖産工業を教ふること」である。これは日本との通商貿易にも役に立つし、朝鮮人を「開導」するこ

ともなる。そして「これにつきても教育の必要は切迫し來たる、朝鮮人の教育は啻に知識を与へ、徳義を養成せしむるのみならず、進んで東洋の形勢を知らしむること必要なり、」(「基督教徒と朝鮮」一八九八・九・二一、二三)

この記事には、この時本多は京城学堂と関係を持ち、釜山には荒波平次郎の開成学校が、光州には奥山の設立した実業学校があったと記されている。

こうしてキリスト教や仏教など宗派を問わず、組織を持つ宗教団体は「大きな視野」の下に積極的に政治と関係を持つことを考えて、その結果様々な活動を展開することになる。

八 開教活動の国家活動への参加

日露戦争を迎えるともっと明確な主張が現れてくる。

韓国布教の必要は言ふ迄もなき事なるが他の政治、法律、教育、兵制、医術、農工、商業、凡に付て彼等を開導誘掖して我日本を慈母の如く信頼せしめ置かねばならぬ事は日露問題起りてより今更の如く屢々するは具眼者の笑ふ処である。(「韓国布教の現状(上)」一九〇四・一・二二)

これは無署名論文であるから「中外日報」の主張と判断できるだろう。これを読むと、宗教者の目には布教活動があらゆる植民地活動と結びついていると映っていたことがわかる。そして布教も「日本を慈母の如く信頼」させるためのものに転化したのである。

明治以降の宗教者は積極的に国家の活動に参加してきた。日清戦争、日露戦争の時の従軍僧をはじめとして後の日中戦争期にいたるまで、そこでは宗教の論理よりも国家の提案する論理が強く浮き出していた。例えば対中国二十一ヶ条要求問題の中に布教権を含ませようとした宗教者の運動は、国家の力を利用して布教を推進することを考えたのであろうが、利用することで国家の論理の中に宗教の論理を埋め込むことになった。既にこの無署名論文にはそうした宗教者の

姿勢が読み取れる。

三 「中外日報」とアジア認識の葛藤

「中外日報」のすべての記事が統一された思想によって編集されているわけではない。どちらかといえば政府よりの無署名記事に対して、しばしば署名論文を掲げて異なる意見を示していた。

一九三一年九月一八日に始まった満洲事変は東アジア全体に重荷を課すことになったが、日本のマスコミにも桎梏を与えるもので、各新聞も政府や軍部の方針を批判できる状態ではなかった。「中外日報」の各紙面も「国論統一に奮励せよ 大谷派本山満蒙問題で全国百万門末に論達す」(一九三二・一一・一)、「臨済黄檗各僧堂が連合して 満洲出征兵慰問募金托鉢団 大挙、京洛の巷を練る」(一九三二・一一・二〇)などの記事で埋められている。しかしその一方で中国僧釋太虚の「日本四千万仏教民衆に寄するの書」を翻訳して掲げていた。(「日本仏教徒に寄する書 中華民國僧太虚法師 同信同教徒に呼びかく」一九三一・一一・二五)そこには次のような文言が含まれていた。

……日本の四千万信仏の民衆は応に速かに一大連合を成し菩薩大悲大無畏の神力を以て日本軍閥政客に因果の正法を論し其の一切の非法行為を制止すべし、勸阻して聴入れられざる時は進んで東亜南亞乃至全世界の仏教徒を連合し、仏教の国際組織して亞州各民族を連合振興し皆平等自由を獲しむるを以て職務となし、又世界上平等に相待する各民族を連合し永久の平和を実現せしむるを以て職務となし、……

一部が省略されているにもかかわらず、掲載された文は日本軍部を批判するとともにアジア仏教徒連合の理想を語る格調高い文になっている。

この後、恐らくこの太虚法師の文を意識して書かれたものと思われるが、藤井草宣の「騙術・武力・実力」(一九三二・

一・三〇（二・二）や「此際日支仏教徒提携し 和平運動を誘発せよ」（一九三二・二・一五（一七））が掲載される。前者の記事は全体として満蒙侵攻を批判する文となっていて、最後に「日本が今や、異口同音に『満蒙は日本の生命線なり』と称へて満蒙を一朝一夕に領有し得るかの如く浮かれつつ、大いに国際的に飛躍せんとす。ソレ危いかな。華吹いて先づその根亡ばんとするにあらざるか。」と締め括っている。後者の記事では日本人が中国を理解していいことを強調し、「誠に私は、今の今でも、支那を愛し、支那人を悲しみ、支那の仏教徒を懐ふ心で一杯である」と書くのである。実に屈折した言い方が続くが、これもやはり全体として日本の中国侵略への批判となっている。

もちろんこうしたものばかりではなく、北京本願寺の光岡良雄による「太虚法師台鑑」（一九三二・一・七）のように太虚法師批判も掲載されている。

「中外日報」の中にもアジア認識についてさまざまな対立があった。これは宗教者だけではなく日本社会全体に言えることである。しかし「中外日報」に関して言えば、開教師たちが送ってくる現場のレポートがより鮮明に中国や朝鮮の植民地の状況やアジアの現状について伝えていた。そのために日本国内の公式のアジア認識に対抗するアジア認識を育てることができたように思われる。今後、台湾や東南アジアまで含めて「中外日報」を通じた宗教者のアジア認識をさらに追う必要があるだろう。

一九二二～一九二四（大正元～三）年「中外日報」アジア関係記事目録

- | | | |
|------------------|------|-------------|
| 一九二二（大正元）年 | 五・二八 | 故李容九氏の略歴（下） |
| 五・二六 京城本願寺の降誕会 | 六・三 | 李容九氏葬儀日取 |
| 五・二七 故李容九氏の略歴（上） | 六・六 | 台湾蕃地の僧侶 |

6・7	香港本願寺	6・25	營口の大法会
6・7	支那と基督教大学	6・28	奥村女史の銅像
6・7	蕃人布教と討伐隊	6・29	朝鮮開教と農場
6・8	朝鮮と宗教	7・3	印度古代女性観(上)
6・9	朝鮮開教事情	7・3	文学博士 井上哲次郎
6・10	朝鮮に於ける女子教育	7・3	營口教信
6・11	浄土 朝鮮開教	7・3	浄宗と開城学堂
6・11	蒙古探検談	7・4	印度古代女性観(下)
6・13	基隆の千人塚	7・4	文学博士 井上哲次郎
6・13	醍醐雑信 朝鮮概況	7・4	西派に圧倒されつつある大谷派の朝鮮開教
6・14	朝鮮基督教問題	7・5	洞宗朝鮮布教任命
6・15	朝鮮総督府の対宗教方針一変す	7・5	支那みやげ
6・15	注目すべきの二事実 李氏葬儀と鮮人	7・5	台湾だより
6・15	大陰謀事件の影響	7・5	台湾近信
6・15	神道と侍天	7・6	朝鮮と布教者
6・20	浄土宗の朝鮮開教総監督	7・6	台湾蕃界布教会議
6・21	西派台湾布教現状(上)	7・7	朝鮮雑感(上)
6・21	台北監獄幼年受刑者の教化	7・7	神宮奉賛会長 藤岡好古氏談
6・22	真言僧の教田経営	7・9	生蕃化導法
6・22	台湾と浄土教会所	7・10	朝鮮雑感(下)
6・23	浄土宗の清国開教使會	7・10	神宮奉賛会長 藤岡好古氏談
6・24	植民政策と宗教	7・11	台湾の新竹寺
6・24	浄土朝鮮開教総監任命	7・11	朝鮮雑感(下)
6・25	西派満洲布教	7・13	神宮奉賛会長 藤岡好古氏談
6・25	大連宗教家懇談會	7・13	台湾の新竹寺
		7・15	朝鮮みやげ
		7・15	曹洞宗朝鮮布教総監
		7・15	北野元峯師談
		7・16	西本願寺朝鮮開教員一覧
		7・17	朝鮮の各宗布教(上)
		7・17	▲真宗大谷派
		7・17	▲真宗本願寺派
		7・17	朝鮮の各宗布教(下)
		7・17	▲曹洞宗
		7・17	▲日蓮宗
		7・17	▲臨濟宗
		7・17	▲真言宗

7・19	海外の黒住教	8・23	東洋平和の保全と本願寺 鬼窟生
7・19	生蕃教化事務会議	8・23	回々教と日本 印度人バラカッタ氏談
7・24	京城の御祈禱	8・24	東洋平和の保全と本願寺(統) 鬼窟生
7・28	釜山の店員慰勞会	8・24	台北西派別院の敬弔
7・31	台湾住民の祈願	8・25	京城出張所の建築
7・31	樺太住民の赤誠	8・25	東洋平和の保全と本願寺(統) 鬼窟生
8・5	趙総督等の奉悼	9・2	三面論説 江戸っ子の意気と支那人の形式
8・5	南京遥拜式	9・6	朝鮮僧の不埒
8・6	日本基督教会台湾特別伝道	9・19	印度マハンタ僧正の弔辭
8・7	朝鮮宣教師の祈禱	9・19	朝鮮の孝子 寺内総督褒状を送と
8・7	台湾の浄土宗	9・21	京城西本願寺の奉悼
8・8	台湾便り	9・27	支那の孔子拝礼廃止
8・10	蒙古の天主教	9・27	漢口西派出張所の奉悼
8・10	台湾の鐵道布教	9・29	印度經典の和訳
8・11	鮮人の哀号	10・9	生蕃の本願寺参拝
8・12	妙心派の滿洲布教行惱	10・14	寺内総督の軍刀奉納
8・12	京城講習会	10・24	新嘉坡の宗教
8・12	朝鮮と洞宗布教所	10・24	朝鮮に於ける西派勢力
8・12	南洋の蝦蟇仙	10・26	朝鮮の国宝を盗む
8・16	朝鮮蔚山開教	10・29	旅順に於ける宗演師
8・17	朝鮮西派便り	10・30	支那の日本僧招待
8・18	朝鮮疑獄事件	10・31	鮮人基督教団
8・19	樺太布教擴張計画	11・2	滿洲教界の情勢
8・21	京城の講習会	11・4	慶州仏跡移転問題

11・5	旅順に於ける積宗演禪師	12・26	福島都督と大喇嘛
11・10	満洲巡教談	12・27	馬來人の風習
11・13	満洲と布教 積宗演師の談	一九一三(大正二)年	
11・13	喇嘛となれる日本人	1・9	朝鮮の正月 頗る振った奇習沢山
11・13	寺内総督と石窟庵	1・9	馬來半島邦人弘濟会
11・15	琉球人の宗教	1・9	朝鮮と組合教会
11・15	西派の満洲特別布教	1・12	宣教師襲はる(重慶)
11・16	曹洞宗議會 ▲京城別院問題 ▲朝鮮布教所敷地問題	1・13	支那の風俗
11・21	朝鮮三布教所開設	1・15	満州宗教界の人物(一) 世外隠士
11・26	京城西派別院の落成	1・16	活仏使節の露都着
12・1	朝満教況視察雜感 豊山派宗務総長富田教純師談	1・20	暹国皇帝陛下記念品頒與式 世外隠士
12・1	上海別院内証	1・21	日本と暹羅
12・2	支那の女	1・21	平壤の基督教
12・4	上海仏教近状	1・22	上海の宗教研究会
12・7	支那巡拝の帰朝	1・23	寺内総督の寄付
12・8	金玉均遺骸改葬	1・31	支那人の強盗団
12・9	大連に於ける基督教徒の衝突	2・1	馬尼刺の謝肉祭
12・9	清国に於ける天主教	2・2	活仏の恐悦
12・14	西本願寺より 朝鮮別院講話会	2・8	義州だより
12・14	満洲教界近状	2・9	浦塩本願寺
12・17	朝鮮留學生の牧師	2・11	朝鮮に於ける天理教
12・17	安東の儒者と基督教	2・15	鎮江山と釈仏海師
12・18	朝鮮の天理教	2・15	朝鮮の古墳(上)

2・16	朝鮮の古墳(下)	3・28	支那僧周子禪
2・18	大連の新教会	3・30	黒龍江岸の日持上人旧跡探検
2・23	群山便り	3・31	支那布教権質問
2・24	蒙古と喇嘛教(上) 紫峯	4・2	上海より(一) 来馬琢道
2・24	中野氏の渡清 ▲支那僧に変装して歴遊	4・2	支那蘇州城外より
2・25	錫蘭の仏法	4・3	上海より(二) 来馬琢道
2・25	中野氏の渡清(続)	4・5	台湾土産(上) 釈宗演
2・26	蒙古と喇嘛(下) 紫峯	4・6	南滿鉄会社の厚意
2・26	基教と印度人	4・6	台湾土産(下) 釈宗演
2・27	朝鮮総督府の提唱	4・7	杭州より(一) 来馬琢道
2・27	朝鮮の曹洞宗現況	4・8	杭州より(二) 来馬琢道
2・27	洞宗京城別院の再建	4・8	曹宗新築京城別院
2・27	朝鮮円宗の動静	4・9	杭州より(三) 来馬琢道
2・27	来馬師支那行の日程	4・10	杭州より(四) 来馬琢道
2・28	印度彫刻の仏画	4・13	支那僧大会 支那仏教の頽廢を慨く
2・28	朝鮮の宗教令	4・13	蘇州付近より 来馬琢道
2・28	義州仏教婦人会	4・14	寧波府行 中野達慧
3・2	印度の新聞に出た日本の琉球の記事	4・14	南京より 来馬琢道
3・3	義州の西本願寺	4・15	蘇州より 来馬琢道
3・14	奉天の教界	4・17	洞宗開教現状(下) ▲朝鮮 ▲海外
3・20	台湾土人の宗教	4・24	再び上海より(二) 来馬琢道
3・24	中国巡教中の木邊上人	4・25	寧波より(一) 来馬琢道
3・25	蝦夷だより	4・25	満洲の教界
3・27	香港に日本式の寺院建築されんとす	4・26	ダンマバラ師来る

4・26	上海より(三たび) 来馬琢道	5・16	南京途上 中野達慧
4・27	支那紀行吟 来馬自慰庵	5・16	極東植民地の新教区
4・27	大連の基督教 ウィン博士帰米の送別会	5・18	黒龍沿岸探検僧出發
4・29	日持上人黒龍沿岸旧跡探検	5・19	南京途上 中野達慧
5・1	ダ師愈々来る	5・25	南京途上 中野達慧
5・2	杭州西湖の遊玩 中野達慧	5・26	諸勅建普徳禅寺 中野達慧
5・2	留学生の出発	5・27	下関見物 中野達慧
5・4	朝鮮の宗教勢力	5・28	下関見物 中野達慧
5・5	泊西湖玉泉寺 中野達慧	5・29	長江瞥見 中野達慧
5・5	印度人と宣教師 テーケイ生	5・30	長江瞥見 中野達慧
5・5	支那の宣教費七十万弗	5・31	湖江を遡る 中野達慧
5・6	諸武林靈隠雲林寺 中野達慧	6・2	日印協会の近状
5・7	諸雲棲寺 中野達慧	6・2	朝鮮の仏教衰亡を顧て日本の仏教に及ぶ
5・8	賽昭慶律寺 中野達慧		男爵 目
5・8	支那土産 来馬琢道	6・3	旅順における蘭田勸学
5・9	靈芝崇福律寺	6・3	湖江を遡る 中野達慧
5・10	餐天竜山	6・4	湖江を遡る 中野達慧
5・11	餐育王山 中野達慧	6・5	支那人の祈祷懇請
5・11	朝鮮基督青年会	6・5	喇嘛僧統々避難す
5・12	江蘇省周遊 中野達慧	6・5	湖江を遡る 中野達慧
5・13	江蘇省周遊 中野達慧	6・6	湖江を遡る 中野達慧
5・14	諸金山寺 中野達慧	6・8	オッタマ比丘の帰国
5・15	到焦山寺 中野達慧	6・8	印度展覧会
5・15	支那仏教大会	6・8	撫順に於ける蘭田宗恵師

6・13	蒙古とラマ教	8・2	椰樹陰下の迷信(一)	▲印度教徒の奇行
6・15	支那の典礼通牒	8・2	支那僧来朝説	
6・15	黄檗山記行 無舌	8・3	椰樹陰下の迷信(二)	▲印度教徒の奇行
6・16	洛陽行 中野達慧	8・3	八木開教師の殉教	
6・17	樺太開教の現状	8・4	椰樹陰下の迷信(三)	▲印度教徒の奇行
6・17	民区に政府の布教の視察	8・5	上海の日蓮宗	
6・18	朝鮮土産談	8・6	椰樹陰下の迷信(四)	▲印度教徒の奇行と日本の俗信
6・19	支那基督墮落	8・6	南報	
6・19	滿洲に於ける蘭田師	8・7	南報(下)	
6・19	見た儘の支那仏教	8・7	裏から観たる朝鮮(上)	
6・22	めたる荒廢の跡▲	8・8	裏から観たる朝鮮(下)	
6・22	支那仏教徒の奮起	8・9	喇嘛廟の焼失	
6・24	支那仏教復活の時期	8・9	滿州開教の一部面	淨曹日の三宗
6・24	支那仏教の将来	8・10	洞宗台湾別院主新任	
6・29	孔子教と基督教	8・21	朝鮮開教時談(上)	曹洞宗朝鮮布教総監北野玄峰
6・29	支那仏教徒の覚醒(上)	8・21	朝鮮基督教現勢	
6・30	支那仏教徒の覚醒(中)	8・21	印度に於ける日本売春婦の生活	
7・1	支那仏教徒の覚醒(下)	8・22	朝鮮開教時談(下)	曹洞宗朝鮮布教総監北野玄峰
7・13	喇嘛僧の生活状態(一)	8・23	洞宗朝鮮開教近況	
7・14	喇嘛僧の生活状態(二)	8・24	隣邦の基督教界	
7・15	喇嘛僧の生活状態(三)	8・25	淨宗朝鮮開教総監病む	
7・17	蕃界布教の中止	8・26	支那時局談	
7・27	台湾生蕃の宗教	8・28	朝鮮の西派教勢	
7・13	支那の宣教事業	8・28	千島アイヌの話	鳥居龍蔵

10・10	10・8	10・6	10・4	10・3	9・28	9・23	9・22	9・20	9・17	9・16	9・14	9・9	9・8	9・7	9・7	9・5	9・4	8・31	8・31	8・31	8・31	8・29	
対支経綸の急先鋒 △小栗栖香頂氏の先見	漢口通信 神田翠石	浄宗開教区だより	朝鮮瞥見 □南駐在開教使 山内□□	上海別院の活動	浄宗朝鮮開教使長決定	対支士追悼会	鎖主義 △南陽の宗教	異郷物語 △マレエ半島 △女は賤業婦 △開戸閉	豊山派の朝鮮開教師募集	支那問題と仏教徒	日支仏教連合会創立	上海の維摩会	朝鮮布教現状 最も盛大なは天理教と天主教	天津宗教 南那所見 曹山 釈元恭	南北氣質の比較 支那所見の一 曹山 釈元恭	浄宗開教区教信 ▲樺太 ▲朝鮮	馬来半島より謝状	亞細亞民族の覚醒 旅順にて ダルマバラ氏談	朝鮮総督の寄付に係る巨材到着	慶州の新旧宝	旅順戦跡憑弔会	宗社党と黄天教	開教師殉教
12・6	12・5	11・30	11・26	11・20	11・16	11・15	11・15	11・10	11・8	11・8	11・7	10・30	10・27	10・26	10・24	10・24	10・22	10・20	10・19	10・17	10・16	10・14	10・10
洞宗朝鮮布教使長問題	冬空の釜山より	台北集注伝道	感想一二 在リオン 法学士 下間空教	朝鮮宗教談	朝鮮人布教に苦心せる巖常円氏(下) 京大 竹郎生	朝鮮人布教に苦心せる巖常円氏(上) 京大 竹郎生	台湾だより	アイヌの得度	台湾の天主教	印度留学生の昨今	満洲の小学児童 巖谷小波	満鉄の巡回講話	朝鮮開教に努力せよ 柴田宗務局長談	都督と幼稚園	大連別院	朝鮮西別院の桂公追弔	沖繩の開教地	満鉄沿線の講演	支那布教権問題 談話会の外務省訪問	浄宗開教師	朝鮮から仏道修行に來る兄弟僧	清国大連明照寺	朝鮮線督府を威嚇せん 日本基督教大会決議

12・10	台湾だより	1・23	台湾開教々勢(一)
12・12	上海の土地十万円	1・23	朝鮮の本山制
12・14	撫順の本願寺	1・24	民族覚醒の危機 茅原華山
12・17	台湾と基督教	1・25	開教地の噂
12・20	高橋博士の印度視察報告	1・27	天理教の上海布教
12・21	治蕃布教師引揚事情	2・2	樺太に於ける薩南教(上) 中目広島高師教授
12・23	満鉄総裁更送と沿線講話	2・6	樺太に於ける薩南教(中) 中目広島高師教授
一九一四(大正三)年		2・6	朝鮮基督教勢力
1・5	満洲大連明照寺の新年	2・7	支那の信教自由
1・7	朝鮮人改宗費	2・7	樺太に於ける薩南教(下) 中目広島高師教授
1・8	樺太開教々勢 某宗開教師長談	2・14	釜山の真言宗
1・8	浦塩の開教 △軍事探偵の嫌疑 太田覚眠氏談	2・17	朝鮮国宝の保護
1・9	海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検(一)	2・17	新疆考古図譜
1・10	海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検(二)	2・18	天津短信
1・11	海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検(三)	2・22	朝鮮大邱使
1・11	新疆回教の首領	2・24	朝鮮人の仏道修行
1・12	海外宣教の先駆者日持上人遺跡探検(四)	3・12	連枝の朝鮮巡教
1・12	上海維摩会	3・17	蒙古活仏より日本天皇に上る
1・14	日宗の満洲布教	3・24	露西亜の教育 小西増太郎
1・16	台湾の浄土宗	3・27	朝鮮総督府と基督教
1・17	樺太開教難	3・28	上海に天理布教
1・19	大陸の回教事情	3・31	朝鮮に禅の授戒 ▲大徳寺管長の渡鮮
1・21	朝鮮仏教同朋団	4・1	英国々教派の朝鮮伝道協議
1・23	鮮僧の洞大入学	4・6	台湾伝道譲与

4・6	上海へ天理教伝道	7・9	海老名氏と道庁
4・20	露国、活仏を殺さんとす	7・14	寺内総督の牧師招待
4・21	朝人と救世軍	7・17	露国の東方教化
4・22	台北監獄死者追弔会	7・17	海州布教所の新築
4・26	朝鮮の対宗教策一変 △鮮僧優遇せらる	7・18	上海の宗教界
4・27	朝鮮の片田舎より	7・18	支那留学生派遣
5・1	支那開教だより	7・19	樺太に大農場 神奈川県訓育院の事業
5・7	錫蘭仏教の現状 △ダルマバーラ氏の近信	7・20	朝鮮に於ける見性氏
5・20	朝鮮に於ける北魏式芸術 工学博士 関野貞	7・21	印度の結婚式 純然たる宗教的儀式
5・24	京城教信	7・27	釜山の宗教界
5・29	台湾の禅風	7・23	朝鮮の教況
6・1	露国鮮人伝道問題と神学校	7・27	朝鮮の同志社会
6・14	大道の明照寺	8・1	朝鮮別院の留学生
6・15	大連関東婦人会の奉弔法要	8・8	沖繩の宗教界
6・19	光州監獄教師任命	8・14	朝鮮僧の優遇
6・20	海老名弾正氏の渡鮮	8・14	平壤監獄教師任命
6・25	在支宣教師保護	8・15	近代印度に於ける宗教改革運動(一)
6・25	寺内総督宣教師招待	8・15	崎作三郎
7・2	露西亜の伝説と民謡 相馬御風	8・16	近代印度に於ける宗教改革運動(二) 早大教授 内ヶ
7・2	西藏及蒙古に於ける仏教の伝播(上) 古屋諦道		崎作三郎
7・3	西藏及蒙古に於ける仏教の伝播(下) 古屋諦道	8・18	朝鮮の禁酒運動
7・4	浄宗の朝鮮開教方針	8・18	膠州湾引渡の要求
7・7	暹羅の奇人種	8・18	交付を迫られたる膠州湾
7・9	朝鮮の宗教活動	8・18	戦後の目的地は支那

8・18	近代印度に於ける宗教改革運動(三) 早大教授 内ヶ	8・29	支那の諸方面
8・19	青島の海陸兵力	8・31	戦雲余録
8・19	支那革命党と独逸の社会党	9・2	膠州湾諸島我が手に帰す
8・21	我が掌中にある膠州湾	9・3	朝鮮大邱教況 △新開都市の典型
8・22	日本は支那の為に膠州湾を引受ける	9・5	植民地と基督教
8・23	見よ本日(の)正午! 遂に宣戦の宣告?	9・5	日本軍上陸の公報
8・23	青島の死守と日本人引揚げ	9・10	旅順に於ける陸海軍布教
8・23	支那に大暴徒蜂起す	9・14	生の復活死の凱歌 従軍布教師を送る
8・23	独帝の膠州直接還付説	9・15	洞宗朝鮮布教現状
8・23	支那の英仏兵動く	9・16	安東県まで(一) 天倪生
8・23	支那に於ける独米関係	9・17	欧州動乱と支那問題
8・23	膠州湾問題の米國と支那	9・17	我が軍占領の即墨と高密
8・24	膠州湾の総督は何人ぞ	9・18	占領要害膠州の地勢
8・25	膠州湾と奥国軍鑑	9・21	我軍の新上陸地
8・25	膠州湾の意地と独逸婦人	9・22	我軍の捷報
8・26	支那の戒嚴令	9・22	白沙河左帯の占領近し
8・27	台北別院の建築	9・23	我軍柳樹台を占む
8・27	京城の夏期説教	9・23	我攻囲軍の前進
8・27	膠州湾の動搖	9・23	青島沖掃海進歩
8・28	樺太別院入仏式	9・24	掃海任務の経過
8・29	西比利亞開教	9・26	英軍の青島攻撃参加
8・29	膠州湾封鎖宣言	9・27	我軍の独軍撃退
8・29	青島攻撃	9・27	陸軍飛行機の勇躍
		9・29	青島攻囲軍全線動く

9・29	続々快報来るべし	10・7	宣教師退去命令
9・29	宣教師より受くる害	10・7	我軍の活動と山東問題
9・30	愈々青島に通る	10・8	日軍の認容と独の要求
9・30	日本に援軍要求	10・9	哈府布教場の再興
9・30	印度へ留学 大谷光演法主の援助	10・9	安東県まで 天倪
10・1	青島益々大激戦となる 陸軍省公報	10・9	我軍益々躍進
10・1	海と空よりの大攻撃 海軍省公報	10・10	我軍の砲撃と敵の気球
10・2	宣教師の讒誣	10・11	我軍済南に入る 英国将校の日軍批評
10・2	樺太通信	10・13	青島攻囲軍
10・2	膠州湾大砲撃	10・14	青島攻囲軍活動
10・2	陸軍飛行隊の爆弾効を奏す	10・15	聖旨伝達 陸軍省公表
10・3	青島大攻撃	10・15	青島攻囲軍
10・3	我掃海船沈没の経過	10・16	従軍布教と精神教育(上) 陸軍少将 小原正恒氏談
10・3	我重砲の偉効	10・16	従軍布教と精神教育(下) 陸軍少将 小原正恒氏談
10・4	我二将校の壮烈	10・17	従軍布教と精神教育(下) 陸軍少将 小原正恒氏談
10・4	董家湾外の爆音 掃海船又沈没す	10・19	汝敵を愛せよ 支那に於ける英独の宣教師
10・4	山東鉄道占領と支那の誤解	10・21	我が高千穂沈む
10・4	支那陸軍中の主戦論者	10・22	我南遣隊の活躍
10・5	我軍の活躍	10・22	山東省開教発願
10・5	日支の交渉 円満解決説	10・23	活仏の帝号廃止
10・5	支那の憤慨と憂慮	10・24	極東総督と太田氏
10・6	支那は日本に兵力を以って抵抗すべきや	10・24	敵襲撃して退けらる
10・7	山東鉄道占領は正常の手續なり	10・24	海軍重砲隊の砲撃
10・7	我軍の中立確保	10・29	慶尚南道共進会開会式

10・29	我軍の敵砲破壊	12・2	南支那と基教(一)	東京基督主事	山本邦之助
10・31	朝鮮と宣教師	12・2	光瑞氏の行動		
11・3	悪徒宣教師枚挙に違なし	12・2	台湾統治の前途		
11・3	朝鮮京城教況(上)	12・3	南支那と基教(二)	東京基督主事	山本邦之助
11・4	印度回数徒英国の勝利を祈る	12・4	光瑞氏消息		
11・4	朝鮮京城教況(下)	12・4	光瑞氏と総督		
11・6	印度総督回教徒煽動防止のために布告す	12・5	印度消息		
11・7	英国と埃及印度の回教徒	12・6	印度消息(承前)		
11・8	青島終に落つ	12・8	南支那と基教(三)	東京基督主事	山本邦之助
11・10	青島陥落と処分問題	12・8	京城に於ける大谷光瑞氏		
11・11	露国の極東通日露を論ず	12・9	光瑞氏の旅程		
11・12	軍国教育と文部省	12・9	安東県より		
11・13	独逸側の新聞と宣教師	12・9	光瑞氏大喇嘛に会う		
11・14	独帝と青島陥落	12・10	光瑞氏と印度		
11・14	比律賓独立の陰謀	12・10	光瑞氏の大連永住		
11・14	釜山教信	12・13	光瑞氏の行程		
11・15	釜山教信	12・13	安東県より(一)		
11・15	青島陥落と天理教	12・15	安東県より(二)		
11・18	青島入城式	12・16	対支問題と国民の自覚	△支那布教問題	斯波前宗
11・27	朝鮮鎮海新潮		教局長談		
11・28	大谷光瑞氏の大陸行	12・16	朝鮮総督と基教		
11・29	朝鮮開教と篤志者	12・16	宣教師と侮辱		
12・1	光瑞氏は何をするだろう	12・18	蒙古大会議		
12・1	南部支那基教大伝道	12・19	朝鮮教況視察(上)	浄土宗庶務課長	窪川旭丈氏

日本の開教活動とアジア認識

12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
27	27	25	25	23	20	20	20	20	19	
	上海に於ける光瑞氏 上海教界より	光瑞氏消息	袁總統天に祈る	ワルデックと日置老僧	東力西漸の気運 代議士 片桐西次郎氏	従軍布教報告会	安東県より(三)	朝鮮教況視察 (下) 浄土宗庶務課長 窪川旭丈氏	怪僧の大繁忙 浜口熊嶽近く露西亞に渡らんとす	シャマン教 巴爾虎の五大寺